海外研修　様式第２号

2026 年　10　月 22　日

武蔵野美術大学　学長　殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	後藤映則	所属	視覚伝達デザイン学科
		職位	教授

研究課題	オーストリア・グラーツの芸術祭における作品の発表・展示と調査、およびヴェネチア・ビエンナーレにおける現代アートの動向の視察
研究先機関	esc medien kunst labor（オーストリア・グラーツ） ヴェネチア・ビエンナーレ（La Biennale di Venezia、イタリア・ヴェネチア）
主な滞在地 （国・都市名）	オーストリア・グラーツ、イタリア・ヴェネチア
渡航日程	2026 年　9　月　15　日　～　2026　年　9　月　20　日（　6　日間）
研究目的・理由	オーストリア・グラーツの国際芸術祭 Steirischer Herbst の一環として、アートセンター「esc medien kunst labor」の招聘を受け、新作の設営および展示を行う。展示を通じて、作品に対する鑑賞者や関係者の反応を得るとともに、展覧会の主題や、同時代の作家の表現と問題意識について調査する。 あわせて、ヴェネチア・ビエンナーレを視察し、出品作品を通じて、現代アートの動向を考察する。
研究成果発表予定 （展覧会・著書、論文発表等）	発表・展示した作品を国内でも展示予定。 また、担当する授業やゼミにおいて、テクノロジー・素材・鑑賞者の関係から作品や空間を構想する指導内容として反映させる。
研究内容	本研修は、2026 年 9 月 15 日から 20 日にかけて、オーストリア・グラーツおよびイタリア・ヴェネチアを訪れ、同時代における表現や問題意識、動向について実践を交えながら調査、視察を行なった。 グラーツでは、国際芸術祭 Steirischer Herbst の一環として、アートセンター

esc medien kunst labor の招聘を受け、展覧会「(RE)NEW Part II」に新作《Latency（仮）》3 点を出品した。本作は、透明なアクリルの内部に微細な粒子を配置し、移動する光が通過することで、粒子の関係から像が立ち現れる作品である。9 月 15 日から 17 日にかけて現地で設営を行い、暗所の確保や光源の吊り下げなど、会場の条件に合わせた調整を重ねたうえで、17 日の夜にソフトオープニングを迎えた。

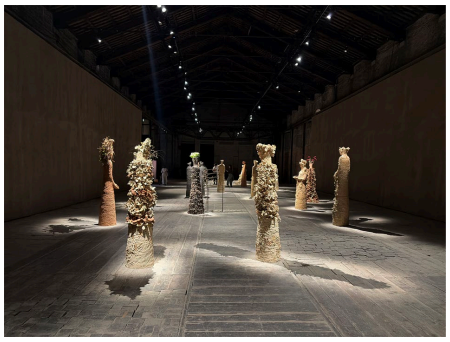
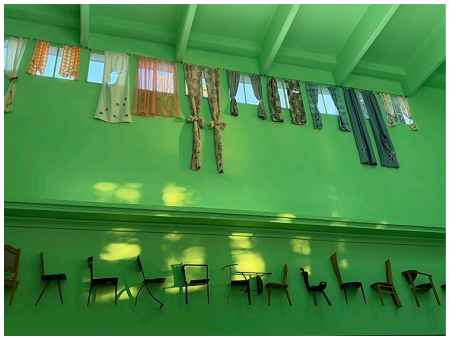
「(RE)NEW」は、現在の危機にどう応答し、社会的な共生を描くためにどのような思考の場が必要かを問う展覧会シリーズである。ハンナ・アーレントの、人は誰もが新しく始めることができるという考えを出発点に、芸術を私たちが新しい技術に批判的に向き合い、共につくり手となるよう促すものとして位置づけている。国際的な現代アートとメディアアートを紹介する本展では、テクノロジーに焦点を当てた作品や、社会への問題意識を提示している作品が展示された。本展に寄せられたパメラ・C・スコルツィンの批評では、本作について、像はあらかじめ存在するのではなく、光と粒子のつかの間の関係の中で、そのつど新たに生み出されると論じられ、暗闇からぼやけた輪郭が立ち現れる様子は、存在そのものの根源的な不確かさを映し出すものとして評された。さらに、共同出品者のジュジ・アモローゾの表現にも触れ、キュレーターや関係者から反応を得ることで、表現と文脈の両面において多くの示唆を得た。
Steirischer Herbst ‘26 は「Red Flags」をテーマに掲げ、グループ展やパフォーマンス、討議を通じて、文化戦争と現実の戦争をめぐる物語を扱い、深刻さとユーモアを結びつける構成になっている。





写真: esc medien kunst labor

続いて、第 61 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展（テーマ「In Minor Keys」）を視察した。本展は、2025 年に逝去したコヨ・クオの構想を、彼女のチームが引き継いで、加速し続ける生産性から切り離された時間の中で、立ち止まり、思索することを来場者に促すものであった。
国別パビリオンでは、イタリア館、ドイツ館、ポーランド館が特に印象に残った。イタリア館のキアラ・カモーニ「Con te con tutto」は、ともにつくり、ともに生きる過程を通じて、人間と人間以外のものとの関係を問い、手仕事による形

	や有機的な素材がつながりの感覚を生み出していた。ドイツ館では、ソン・ティウが、自身が育った東ベルリンの取り壊し予定の集合住宅の窓を、モザイクとして外壁に再現し、ヘンリケ・ナウマンは、東ドイツで育った記憶を、物や室内の再構成によって描き出していた。ポーランド館では、ろう文化と聴者の文化のあいだのコミュニケーションを、音と映像によるインスタレーションで構成し、言語が開かれていく感覚の場を提示していた。 これらを通じて、個人の記憶や身体の感覚から、改めて社会や歴史を捉え直そうとする現代美術の動向が見えてきた。とりわけ、急ぐことのない時間への関心や、知覚の境界を押し広げる試みは、自身の表現を同時代の文脈の中で捉え直す契機となった。   本研修は、これまで検証してきた自身の手法による作品を、海外の芸術祭において初めて発表する機会となった。作品発表の実践と、ヴェネチア・ビエンナーレの視察を通じて、像の生成と知覚をめぐる表現について考察を深めることができた。この経験から得られた知見は、講義での事例紹介や演習、ゼミでの研究指導に反映させ、今後の制作と研究、教育活動に還元していく。
大学における 研究成果の還元	海外の芸術祭での作品発表とヴェネチア・ビエンナーレの視察から得た知見を、授業での事例紹介や演習、ゼミでの研究指導に反映させ、今後の授業内容に還元する。国際展の実例をもとに、学生が国際的な視点を養うための機会として活用する。

研究日程（全滞在期間）

出発日 （現地時間）	出発地 （国・都市名）	到着日 （現地時間）	到着地 （国・都市名）	研究内容等	滞在日数
9/15	日本・東京	9/15	オーストリア・グラーツ	移動	1
9/15～17	オーストリア・グラーツ			設営・発表	3
9/18	オーストリア・グラーツ	9/18	イタリア・ヴェネチア	ヴェネチアビエンナーレ視察	2
9/20	イタリア・ヴェネチア	9/21	日本・東京	帰国	
備考					

以上

※　欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※　その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。